

読	み	切	り	ギ	ア	教	室												
文	学	部	2	年		白	井	彪	史										
選	ん	だ	本	の	タ	イ	ト	ル	:										
『	リ	ベ	ラ	ル	の	こ	と	は	嫌	い	で	も	、	リ	ベ	ラ	リ	ズ	ム
は	嫌	い	に	な	ら	な	い	で	く	だ	さ	い		井	上	達	夫	の	法
哲	学	入	門	』															
著	者	:	井	上	達	夫													
出	版	社	:	毎	日	新	聞	出	版										
出	版	年	:	2015	年														

思想開闢！新現代への問いかけ

私がこの本を読んで、この本に抱いた印象
は「衝撃」の一言に尽きる。

この本が対談形式となっていたことが、表
紙からは全く想像できなかつたため驚いた。

また、本自体の内容がこれまでに読んできた
同様のテーマを扱った本とは一線を画した内
容であったことも驚きであった。以前に読ん
だ「政治」を扱った本は、自分の選書力のな
さもあるとは思うが、筆者のイデオロギーが
前面に強く出すぎており、少し読みづらく敬
遠される本であるように感じたからである。

さて肝心の内容であるが、昨今のリベラル
＝革新派の衰退をはじめ、憲法解釈や哲学の
話など多岐にわたる話題や視点を通しながら
「リベラル」を問い直す内容となっている。

ここで考えていきたいのは「リベラル」とい
う言葉の意味である。辞書的な答えとしては

個人の自由を重んじる考え方、自由主義、ひいては革新派閥などを指す言葉ということとなるであろう。そしてこれは保守主義あつての革新であるといえる。しかし昨今のリベラル、リベラリストと言われている人たちを見ていると主義主張を通そうとするあまりに時に保守的とさえ思える行動をしている。これでは本末転倒といわざるを得ない。

また、この本においてもう一つ問われているのは、日本の民主主義のあり方である。民主主義、それは現在の日本の政治体制であり世界で主流の政治体制である。今の社会はかつてのリベラリストたちの努力の産物といえなくもないが、欠点も多い。そしてその欠点について今日におけるまで改善されていないものも多いように思う。日本の民主主義は今、世界的な右傾化に対する対応を迫られている。

これらに我々はどう対処するべきかの答えも

見えていない。しかし、我々は「考える葦」
である。考え続けることで必ず正解にたどり
着けるものと私は信じている。
そして、読書はその正解への糸口の一つを
専門家の知識を一般人に理解できるような形
にして我々に提供してくれている。これによ
って人は賢くなりもするし感動したりもする。
人によっては救いであるかもしれない。本を
読んで他者の知識と出会うこと、これこそが
私が読書をする理由であり、この本を推す根
本の理由でもある。まとめるとこの本は良作
の部類に入り、かつ新たな視点と知識を与え
てくれる一冊である。なので、ぜひこの本を
手に取り、新たな知識の扉を開いてみてはい
かがだろうか。